

# エンカウンター（ENCOUNTER）

## 第 84 号

平成 21 年 4 月 20 日

編集・発行人 〒224-0015 横浜市都筑区牛久保西 2-14-28 山口周三

電話 045-912-1960

### ウィリアム・バークレー

「希望と信頼に生きる ウィリアム・バークレーの 1 日 1 章」

（柳生直行訳・ヨルダン社）より（11）

### 10 月 27 日 自分の家（2）

家庭は自分の家を持ち、自分の鍵をもっているものでなければ、真の意味における家庭とはいえない。

ときどき、一人だけでいることが必要である。

現代人は孤独の術を失ってしまっている。これは現代生活のもつ問題の一つである。...

われわれの模範はイエスである。

カペナウムで、自分を投げ出して人びとのために一日中いそがしく働いたのち、イエスは朝はやく起きて、寂しいところへ出てゆかれた（マルコ 1・35）。また、人びとを教えたり、五千人を養ったりしたのち、群集を立ち去らせ、弟子たちにも先に湖を渡るように命じておいて、彼はただひとり山へ退かれた（マルコ 6・46）

このようにときどき、一人になって神と交わることが必要である。この孤独はそれ自体が目的なのではない。イエスは孤独そのものを求めて孤独になろうとしたのではない。神に会うため、またそれによって力と平安を受け再び人々のところに戻るために、ひとりになることを願ったのである。彼がひとりになったのは、いっそうよく戦うための一歩後退にすぎなかったのである。われわれの場合もそ

うでなければならない。

われわれは神経質な、ノイローゼ気味な時代に生きている。人々は意識的・無意識的に、自分たちは人生に直面しこれと対決することができないのではないか、という怖れを抱きながら生きている。もし神と二人だけになるために多少の時間を割くことができるようになったなら、われわれはもっと平静さと力と落ち着きとを与えられて、どんな環境、どんな状況をも十分に支配しうるようになるに違いない。神と二人だけになることによって、なにごとにも対処しうる平静な、怖れを知らぬ、落ち着いた力を与えられるからである。

## 10月31日 ピレモン

いろんな意味で、ピレモンへの手紙は新約聖書中もっともふしぎな文章である。オネシモという逃亡奴隷に関する小さな個人的な手紙が、新約聖書の中でどんな役割を果たしているのだろうか。

そこには教理もなければ神学もない。それは、主人からなにかを盗んで逃げた奴隷に関する短い、個人的な手紙である。その奴隷はパウロに会って改心したらしく、やがて自分の名前ふさわしい生活をするようになった。オネシモというのは「役に立つ者」という意味である。

なぜこんな手紙が新約聖書の中に入ってきたのだろうか。確実にわからないが、推測はできる。パウロの諸書簡が収集・編集され、一巻の書として公刊されたのは、紀元90年エペソにおいてであった、と学者たちは考えている。それから何年かのち、アンテオケの監督イグナチウスはアジアの諸教会に手紙を書いていた。そのときイグナチウスは、ローマに連れて行かれるところで、やがてはローマの競技場で野獣の群のなかに投じられる運命であった。

それらの手紙のなかに、エペソの教会に宛てたものがある。その手紙はエペソの監督 彼の美しい性格、その名前にふさわしい彼の生涯の有益性 に対して、めったに見られないような最高の賛辞を呈しているのである。

ではそのエペソの監督の名前はなんというのか。オネシモである。

逃亡奴隷オネシモとエペソの監督オネシモとは同一人物である、と信ずる学者たちがいる。パウロの手紙がエペソに集められたとき、オネシモは、自分がかつてなんであったか、またイエス・キリストが自分のためにどういうことをして下さったかをみんなに知ってもらうために、このピレモン宛ての小さな手紙をパウロの書簡集のなかに加えるように主張したのだ 学者たちはそう考えているのである。

## 11月3日 下手にやりなさい

(高校時代にやった下手なオペラの上演が、何年たっても消えることのないオペラに対する愛を注ぎ込んでくれたことを述べたあと、)

高校生によるオペラの上演がドイリー・カート一座のようにうまくいくわけがない。しかしやる価値のあるものは、下手にやっても価値があるものだ。われわれは下手な上演をやった、にもかかわらず、そこから人生の宝を引き出すことができたのである。

われわれはトニー・ジャクリンのようなスコアが出ないからといって、ゴルフをやめはしない。コンサート・ピアニストになれないからといって、ピアノの練習をやめはしない。スパージョンのような大説教家になれないからといって、伝道をやめはしない。たとい手が届かなくても、高きをめざすことはそれだけの価値を持っているのである。

聖歌隊は真に偉大な音楽に挑戦すべきである。

牧師は大きな、むずかしい問題について語るべきである。

教会員は不可能と思われるさまざまな計画の実行に乗り出すべきである。やる価値のあるものなら、下手にやっても価値があるはずである。しかし これは大事な「しかし」である われわれに可能なかぎり、最大の努力をしなければならないということも、また真実である。

聖歌隊は、そのメンバーが練習なんか出なくてもいい、と考えるような状態にあるときは、大曲に取り組む必要はない。

牧師は読んだり考えたりする用意がまだできていないときは、大きな問題について語る必要はない。教会員もまた、半数のものがなにもしたくないというのであれば、大きな計画に乗り出すわけには行かないだろう。

やるだけの価値があるものなら、それに最大の努力を注いで見る価値がある。大きなことに挑戦してみようではないか。やる価値のあるものなら、下手にやっても、最善をつくしさえすれば、けっして無意味に終ることはないのである。

## 1 1月4日 靈的経済学

銀行は預金した分しか引き出せない。人生についても同じことがいえる。

人生に注いだ分しか引き出せない。...みずからは何も与えようとしないで、どうして人生から良いものを引出せるのだろうか。

「私は死ぬとき完全に使い果された人間でありたい」とジョージ・バーナード・ショーは言った。この世で一番幸福な人は、忙しくて自分をあわれんでいる暇のない人、忙しくて自分のことを考えている暇のない人である。

人生は借りたものを払ってくれる。つまり人生に対して与えれば与えるほど、それだけ多くのものをわれわれは引出すことができるのである。

仕事に注ぎ込んだ分だけ仕事から引き出すことができる。

訓練と勉強によって獲得した資格と経験なくしては、ほんとうに満足のゆく仕事、自分と一緒に成長するような仕事は、だれにもできるものではない。子供たちが、きれいな学校から早く出たいと四苦八苦しているのは、まことに悲しいことである。この世は、なにも仕事をしない人間に金を恵んでくれる慈善団体ではない。金を引出すためには、ほんとうの、きびしい労働という預金をしておかなければならぬ。

教会に注ぎ込んだ分だけ教会から引き出すことができる。

教会とは日曜日の1時間のことなり　これがあなたの考え方であろうか。

教会員は牧師と同じほどに礼拝にかかわっており、立って祈る人と同じほどに祈りにかかわっている、ということをあなたは考えたことがあるだろうか。...

われわれが教会なのである。教会とはわれわれが作るものであり、われわれが注ぎ込むものである。

靈的経済学は銀行を含むこの世の経済学と同じ有効性をもっているのである。

## 11月6日 目 標

人生には目標がなくてはならない。

目標がなくては、ほんとうには、なにもできない。

努力する前に努力の対象を一つにしぼらなければならない。これが人間精神の特徴である。学期の終りに試験がないと、勉強が非常にやりにくいのはそのためである。多くのひとが学校や大学を出てしまうと、もう勉強しなくなるというのも、やはりそのためである。

学校では目標があった。だから勉強した。だがいまは努力の目標がない。だから努力しようとしなない。

目標を持つことによって進歩したかどうかがわかる。

目標がなければ、自分は進歩したのかしないのか、まるで分からない。目標は物さしと基準を提供してくれる。明確な目標を設定したときはじめてわれわれは、自分が正しい方向に向かっているかどうかを知ることができる。目標を自覚することによってのみ、われわれは自己満足という怖るべき無気力から救われるのである。

目標は手の届かないところにおかれなければならぬ。理想とはそういうものなのである。

達成できる目標をおいたのでは、それを達成してしまったら、もはや征服すべき世界はないということになる。そうなれば、人生は無気力と停滞におち込むほかはない。これに反して、つねに輝く目標を前方に認めるとき、われわれは日の暮れるまでそれをめざして努力するであろう。

クリスチャン生活の有り方はこれを一言で要約することができる。それは、「イエスを仰ぎ見つつ」歩むことである（ヘブル 12.2）。彼のみが目標である。彼のみが基準である。

イエスのうちにクリスチャンは、時間から永遠と続く目標を持っているのである。

## 1 1月7日 聖書研究

一切の障壁を越えてわれわれが一つになるために聖書を研究する  
としたら、どういうやり方で研究すべきであろうか。

まず聖書に問わねばならぬ。聖書の意味するところは何か、と。

...

つねに聖書全体を念頭において研究しなければならぬ。

おたがいに自分に都合のいい聖書の文句を引っぱってきて争って  
みたところでどちらにも勝つ見込みはない。イザヤは、「こうして彼  
らはそのつるぎを打ちかえて、すきとし、そのやりを打ち変えて、  
かまとし、国は国に向かって、剣をあげず、彼らはもはや戦いのこ  
とを学ばない」といい(イザヤ2・4)、ヨエルは「あなた方のすきを、  
つるぎに、あなたのかまを、やりに打ちかえよ。弱いものに『わた  
しは勇士である』と言わせよ」といっている(ヨエル3・10)。聖書には  
このような矛盾がいたるところにある。だから、聖書の全体的なメ  
ッセージを見出し、それについて考えることが、何よりも大事であ  
る。...

聖書の一般的な意味を問うばかりでなく、聖書が自分になにを語  
っているかを見出さねばならぬ。

そのために、是非とも避けなければならないことが一つある。

それは、自分の考えや理論を支持してくれる材料を求めて聖書を  
読んでではないということである。

聖書を研究するときにはへりくだった心でその前に坐り、聖書の  
なかから自分に都合のいい意味を引出そうとする自分自身の声にて  
はなく、聖書を通して語りたもう神の声に、耳をかたむけるように  
しなければならない。

それは謙虚になるための練習であるとともに、また真理に向かう  
正しい道でもある。

## 11月9日 受取ること

物をもらう場合にも風格というものがある。

贈物をされたとき、三つのことが必要であると思う。

贈物は受け取らなければならぬ。

贈物を拒否することくらい人を傷つけるものはない。...

贈物に対しては感謝しなければならぬ。

ここで「ありがとう」ということばが大切になってくる。ある人に贈物を送ったのに一言のあいさつもなし、その品物が届いたのかどうかさえなかなかわからない、ということがよくある。

一言「ありがとう」ということほど簡単なことはない。またこのことばくらい聞く人の心を高揚させるものも少ない。われわれはこう祈るべきである。「いつも感謝の気持でいさせてください。そして、感謝の気持を人に示すことを忘れないようにさせてください」。イエスでさえ、こうたずねざるを得なかったときがあったのである。「ほかの9人はどこにいるのか」(ルカ 17:17)

贈り物は使わねばならぬ。

贈物をする喜びの半分は、相手がそれを使っていてくれるのを見る喜びである、と書いていい。この点でイエスはすばらしかった。彼はいとも小さな、見たところいかにもつまらぬ贈物を受け入れ、それを栄光化して用いたもうたのである。イエスが最高のことばで称賛なされた与え手は、2枚あわせても1ファージングにも足りぬレプタ銅貨を2つ神殿のさいせん箱に投げ入れた、あの貧しい女であった(マルコ 12:41-44)。神はそのような小さな贈り物をも大いなるものとして用いることができるのだ、とイエスはいつておられるかのようである。

与えることには心のひろさがある。が受取るのにも風格がなければならぬ。



## 11月13日 楽しい我が家

あなたが「人間的」であればあるほど、あなたはますますあなたの家庭を愛するだろう。家庭を愛さない人は、よほど変わった人である。犬は人間に一番近い動物であって、やはり家庭を愛している。私は猫が好きだが、猫は人間からは遠い、非人間的な動物だといわねばならぬ。猫は家庭というものにあまり愛着を感じない。ただしサミーは別である。サミーはわたしのところで前に飼っていたシャム猫で、猫というよりは犬に近かった。わたしどもはサミーの死をいまでも悲しんでいるのである。

詩人たちはみな家庭を愛した。バイロンの詩を覚えておられるだろう。

われわれが家に近づくと忠実な番犬が  
低い声でほえて歓迎してくれる。

われわれが近づくのを見つけて  
目を輝かせて迎えてくれる。なんと楽しいことか。

あるいは、ロバート・ルイス・スティーブンソンがS・R・クロケットに送った詩を覚えておられるかも知れない。そのときスティーブンソンは彼の愛するスコットランドから遠く離れた南海に暮らしていたのであり、健康上の理由から、ついにスコットランドに帰ることはできなかつたのである。

ふるさとの山々よ、わたしの死ぬ前に  
お前たちの姿を見せておくれ、もう一度  
小鳥のさえずりを聞かせておくれ、  
殉教者の墓のほとりでなくヒタキ鳥の  
声を聞かせておくれ。そのあとは  
なにも聞こえなくてもかまわない。…

故郷を持っているものは神に感謝しなさい。そして、故郷のない人たちのことを、同情と温かい心とをもって、思いおこしなさい。

## 11月19日 単純なこと

食養生の経験から学んだことだが、ほんとうに欲しいものは、もっとも単純なものである。人生についても同じことがいえる。

たとえば、家庭がそうである。

朝出かけるときに「いってらっしゃい」をいつてくれるものがない、夕方家に帰ってきてても迎えてくれるものが誰もいない。これほどさびしい人生はないだろう。どんなにひどいあばら家でも、そこに愛さえあれば、世界最高の施設よりもはるかにいいものである。わたしは別に、大きな施設でなされている仕事を、軽んじているのではない。しかし、どんな施設も家庭の代わりにはならないのである。

「楽しい我が家」。まさにその通りである。

友だちがそうである。

私はよく引用するのだが、ソクラテスをはじめ大哲人が作っていたグループの、いわば周辺にいた、ある素朴なギリシア人のいったことばがある。ある日彼は、お前が一番神々に感謝したいこととはなにか、と問われて、こう答えたのである。「わたしみたいなものが、こんなに立派な友だちをもてたこと」。

仕事がそうである。

仕事は何よりも大事なものである。悲しみと孤独に閉ざされたさびしいとき、仕事ほど慰めになってくれるものはない。...

愛するものや友だちを失うのはつらい。だが仕事の対象を失うのは悲劇である。

単純なもののゆえに神に感謝しよう。

家庭と愛するものために神に感謝しよう。

友だちのために神に感謝しよう。

とりわけ、なすべき仕事、またそれをなすための肉体的な力、手の技術、精神の能力のゆえに神に感謝しようではないか。

## 11月24日 笑 い

笑いは神の大いなる賜物の一つである。ここに三つの問いがある。  
あなたは人々を笑わせることができますか。

グループや仲間のなかにその人がいると、たちまちみんなが愉快になって笑い出す、いやその人に会うだけで幸福を感じる、といったそういう明るい人がいるものである。...

笑いを生み出す人は、神の仕事を実践しているのである。

人に笑われても平気でいられますか。

笑われるとひどく腹を立てる人がいる。また、笑われるとすぐにカッとする人がいる。クリスチャンは、イエスへの忠誠のゆえに、世間の人から馬鹿だと思われることがある。クリスチャン生活のむずかしさは、一つには、ここにある。笑われてもそれに耐えることができるようになるためには、謙遜と勇気が必要である。謙遜と勇気、この二つはおそらく人間最高の美德であろう。

あなたは、自分を笑うことができますか。

いろんな意味で、人生における最大の賜物は、自分を笑うことができるという能力である。ときどき自分がどんなにばかげたことをやらかすか、どんなにこっけいな姿を見せるか、をはっきり見てとって、自分のおかしさを自分で笑うことができたなら、人生はずっと生きやすいものになるだろう。

笑いはつねに気持をスカッとさせてくれるものである。とりわけ、自分で自分を笑うときに、そうである。